

山形大学におけるアジア人財資金構想
「とうほくものづくり国際人材育成プログラム」
—平成20年度日本語関連科目の指導報告と課題—

Yamagata University 'Tohoku Monozukuri Industry Talents Relating
to All-Asian Innovation Program'
Japanese Language Subjects 2008: report and tasks

仁科 浩美¹・楊 帆²

NISHINA Hiromi, YANG Fan

Abstract

This paper reports the results of the first year of Yamagata University's six-month Japanese language education within its Human Resources Program for Asian Students 'Tohoku Monozukuri Industry Talents Relating to All-Asian Innovation Program'. Along with the cooperation between industries and university and the supporting of the job search, language education is one of the most important elements of the program. In this semester, both 'Business Japanese I' and an Intensive basic course for the students who have not yet reached the level of Business Japanese have been carried out. The aim of 'Business Japanese I' is to provide students with the knowledge necessary for business writing and a career plan. Particularly in the classes of a career plan, Japanese students were participating too, recognizing through working in cooperation, apart from attaining knowledge, differences and points they had in common with each other. In the intensive basic course, too, there was a lot of actual everyday practice, so the students were not afraid of hearing and using practical Japanese any more.

As for future issues and tasks, practicing more effective coexistence of this program with Japanese supplementary courses will come first.

キーワード：ビジネス日本語、日本語集中基礎、PBL方式、協働作業、日本人学生

1. はじめに

山形大学大学院理工学研究科ものづくり技術経営学専攻（以下、MOT）では、経済産業省及び文部科学省が主導するアジア人財資金構想プログラムの採択を受け、平成20年10

¹ 山形大学国際センター（2009年10月1日より山形大学大学院理工学研究科（工）国際交流センター） 准教授

² 山形大学大学院理工学研究科（工）ものづくり技術経営学専攻 専任講師

月より留学生だけからなる「とうほくものづくり国際人材育成コース（以下、とうほくMITRAI）」を開講した。アジア人財資金構想プログラムとは、アジアを中心とした優秀な留学生を日本と留学生の母国との架け橋になる人材として育成しようとするものであり、育成にあたっては、大学と企業とがコンソーシアムを作り、共同で事業に取り組むプログラムである。

事業の大きな柱には、産学連携専門教育プログラムや、日本ビジネス教育、インターンシップ、就職支援等があるが、その一つとして、ビジネス日本語教育がある。

本稿では、このビジネス日本語教育及びその基礎段階にあたる日本語集中基礎コースについて、まず、受講生の採用段階での日本語能力とコース編成、指導方針について述べる。次に、各コースの半年の学習活動、習得の伸び等について報告し、最後に、次年度に向かつての課題と対策について述べる。

2. 初年度平成20年度の学習者とその日本語能力

2.1. 学習者

本プログラムの対象学習者は、大学院理工学研究科MOT専攻の大学院博士前期課程（修士課程）の学生として学ぶ。初年度である平成20年度の学習者数は4名である。各学習者の詳細については、表1に示すとおり、全員中国からの留学生であり、そのうちの男性3名は2009年10月に来日し、女性1名は学部1年から本大学に在籍する学生である。

表1 平成20年度10月期学習者

	国籍	性別	学部での専門
学習者A	中国	男	経営学
学習者B	中国	男	情報工学
学習者C	中国	男	機械工学
学習者D	中国	女	情報工学

2.2. プログラム開始段階での日本語能力

海外から来日した学習者3名については、来日前に本コース独自のCan-do-statement（資料1）と、作文の課題を出し、能力を測った。

これにより、基本的な日常活動において、「読む」に関するスキルが他のスキルよりやや上回っていること、他者との「話す」スキルが劣っていることがわかった。

さらに、より詳しい情報を得るため、来日直後に、初級内容を網羅した筆記試験と、ACTFL-OPIに準じた口頭試験を行った。その結果、3名のうち、学習者A、B2名の能力は、総合的には初級段階の中間地点、2週間ほど遅れて来た学生Cについては自国での学習方法が独学であることも影響し、初級前半にとどまっていることが判明した（表2）。

また、学習者Dの日本語能力については、既に数年前に日本語能力試験1級に合格しており、日常生活はもちろん、学業においても大きな支障はないと思われた。

この結果を受け、初級段階にある3名については、当初予定していた「ビジネス日本語I」の受講は無理と判断した。そして、最初の半年は、集中的に日本語の基礎固めをし、

表2 来日直後の日本語診断テスト結果

	学習者A	学習者B	学習者C
筆記試験 (x/100点)	73	53	19
口答試験	中級・下	初級・上	初級・中

初級段階を脱することを第一の目標とすべきと考え、「日本語集中基礎コース」を新たに設けることにした。2年後に日本企業に就職するに十分な日本語能力を養うことが最終目標ではあるが、学業においても日本語で専門分野を理解することと、研究発表等の production が重要な要素である。そこで、この2年は基礎からアカデミック・ジャパニーズへ、そして、ビジネス日本語へと徐々に比重を変えて指導を行うことにした。

なお、11月半ばに初期段階でのビジネス日本語能力を測るべく、採択されたプログラムの日本語統一テストに相当するBJT個別テストを行った。その結果を表3に示す。この結果からもわかるように、学習者A～Cはほぼ同レベル、学習者Dだけが突出していることがわかる。

表3 初期段階でのBJT個別テスト結果

	BJT個別テスト点数
学習者A	328
学習者B	337
学習者C	312
学習者D	622

3. コース編成と基本方針

3.1. コース編成

2008年度10月期は、初級段階にある学習者3名については、「日本語集中基礎コース」を実施し、すでに上級レベルに達している学習者1名については、ビジネス日本語科目である「ビジネス日本語I」を実施するという2コース体制で行うことにした(表4)。また、対象学習者が少人数であるため、費用対効果も考慮し、本工学部キャンパス内の留学生の受講も可能とした。ただし、受講においては、本来受講する学習者の妨げとならぬよう、プレースメントテストを実施し、その結果、日本語能力がMOT受講学習者のレベルと同等であること、期間中80%以上の出席率を確保できることを条件とした。

なお、コース開始当初、初級段階にある3名の学習者のうち、学習者Cについては、学習者A、Bとの差が大きかったが、新たなコースを設けることも難しかったため、専任教員2名が空き時間を使い、マンツーマンの指導を行い、短期間に追いつく体制をとった。

表4 2008年度10月期の日本語コース

コース	科目	時間数	単位
日本語集中基礎コース	総合日本語 (weekly test及びフィードバックを含む) 漢字・語彙 聴解 レポート作成 経済学資料読解 ビジネス日本語入門	実質346.5時間 〔1コマ(90分)×11コマ ³ /週×21週〕	無
ビジネス日本語コース	ビジネス日本語I	実質45時間 〔1コマ(90分)×30回〕	有

³ 10月から12月までは、週に総合日本語を9コマ、漢字・語彙、聴解を各1コマ実施した。1月から3月までは、総合日本語を5コマ、レポート作成2コマ、漢字語彙、聴解、経済学資料読解、ビジネス日本語入門を各1コマ実施した。

学習者本人の努力もあり、ひと月半後には、学習者A、Bとの合流が可能となった。

3.2. 日本語指導に際しての基本方針

本プログラムが属するMOT専攻は、社会人の学生も多く通学しているため、通常の大学院の授業とは異なり、専門科目が金・土に集中しているのが特徴である。専門科目においては、本プログラムも同様であった。このことは、専門科目が少ない平日は日本語の授業に専念できるという利点もあるが、ややもすれば、日本人との接触がないまま日常を過ごしてしまう危険性も考えられた。そこで、以下の3点を日本語指導の基本方針とした。

- (1) ツールとしての日本語を指導する。理解だけにとどまらず、運用力を重視する。
- (2) 場数を踏ませることで習得させる。できるだけ実際の場面での経験をさせる。
- (3) 孤立させることなく、学内・学外において日本人との関わりを持たせる。

4. 各コースの活動

本章では、日本語集中基礎コースとビジネス日本語コースについて、それぞれの目標、授業内容、指導の成果、課題について述べる。

4.1. 日本語集中基礎コース

(1) 目標

ビジネス日本語のレベルに達しない学習者向けに集中で基礎固めを行うことによって、「話す・聞く・読む・書く」の四技能を総合的にレベルアップさせることを大きな目標に掲げた。特に日本人とのコミュニケーションにおいて話し相手と場面によって適切に表現を使い分ける能力を身につけさせることを目指した。同時に、大学院の講義を受講するに必要なアカデミック・ジャパニーズの習得も目標とした。

(2) 授業内容

半年の授業を大きく2期に分け、前半の2008年10月から3か月は初級段階において習得しておくべき、日本語の基本構文の習得を中心に授業を行った。後半の1月から3か月は、総合日本語の時間をやや減らし、研究生生活に対応できる日本語能力、いわゆるアカデミック・ジャパニーズに関する学習も行い、プレゼンテーションの基本も学習した。また、ビジネスにおける日本語を意識させるべく、ビジネス日本語入門の授業も取り入れた。

実施科目の目的・内容を表5に示す。各科目のなかで、最も時間を費やしたのは、「総合日本語」であるが、これについては、図1のように4つの段階を踏んだ。また、各科目で主に使用した教材は表6に示すとおりである。

総合日本語においては、10月から12月までは月に1回、1月から2月までは月に2回、計7回日本人学生のティーチングアシスタント（以下「TA」）が授業に参加した。TAが参加する授業では、日本語集中基礎Iの授業における学習の内容と進度に合わせたその時期ならではのトピックを与え、学習者とTAに比較的長時間（30分以上）日本語で話してもらった。多くの場合は学習者とTAは一对一の形で話したが、グループに分かれ、イン

表5 日本語集中基礎の科目と目的・内容

科目名	目的・内容	実施時期
総合日本語	日本語における構文・表現の基礎を習得する。日常生活に関しては自ら問題解決できる能力を身につける。	10月～3月
漢字・語彙	語彙の拡充と運用力をつける。読み・用法における母語との違いを理解する。	10月～3月
聴 解	日常生活での必要な情報が聞き取れるようになる。話し手の発話意図を認識できるようになることを目的とする。	10月～3月
ビジネス日本語入門	待遇表現の原理原則を理解し、初級段階でも使用可能な表現・語彙を習得する。	1月～3月
レポート作成	研究生活で欠かせないレポート執筆の基本を習得する。話し言葉と書き言葉の違い、構想手順、構成、基本表現を学ぶ。	1月～3月
経済学資料読解	経済・経営学に必要な語彙を習得する。大量の情報から必要な情報を得る読み方を習得する。	1月～3月

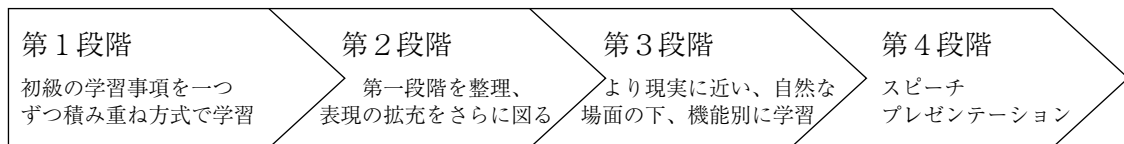


図1 総合日本語の内容過程

表6 使用教材

総合日本語	主教材	<ul style="list-style-type: none"> 『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』スリーエーネットワーク 『みんなの日本語中級Ⅰ』スリーエーネットワーク 『聞いて覚える話し方日本語生中継Ⅰ』くろしお出版 『ビデオ講座日本語 新・日常生活に見る日本の文化Ⅰ』東京書籍
	補助教材	<ul style="list-style-type: none"> 『はじめよう日本語初級Ⅰ、Ⅱ』スリーエーネットワーク 『日本語ドキドキ体験交流活動集』凡人社 絵カード・写真・実物・カルタ・ロールカード・自作シート等
漢字・語彙	『漢字系学習者のための漢字から学ぶ語彙Ⅰ』アルク	
聴 解	『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ 聴解タスク25』スリーエーネットワーク 『毎日の聞き取り50日中級・上』凡人社	
ビジネス日本語入門	<ul style="list-style-type: none"> 『BJTビジネス日本語能力テスト入門 わかるビジネス日本語』アスク 『初級が終わったら始めようほんご敬語トレーニング』アスク 	
レポート作成	『研究報告を書くⅠ、Ⅱ 理工系専門日本語作文技法コース』大阪大学	
経済学資料読解	専門科目「グローバルマネジメント」の配布資料	

フォーメーションギャップを重要視したグループワークも行った。トピックについては、「サークル」、「アルバイト」、「ホームステイ」、「日本と中国のお正月の過ごし方」、「お正月の定番番組」、「就職活動」、「若者言葉」などを扱った。

授業後は、毎回の授業で録音した学習者とTAの会話を文字化し、後日の総合日本語の

授業で学習リソースとして使用した。具体的には、文字化資料を使いながら学習者自身が誤用を探し、自己訂正を行った。学習者が自力で訂正できない場合は、ほかの学習者や教師が手助けをする形を取った。これにより、学習者が知らない、教科書にも載っていないTAの言葉づかいを学習することもできて、多様な表現や語彙の獲得が可能となった。

TAによって、話しやすさと、話のわかりやすさが違うようであるが、7回のTAの授業を通して、学習者らは日本語の会話能力が大きく上達し、多くの表現が学べたとコメントしていた。一方、会話における多くの誤用はTAによって訂正されず、事後の文字化資料による学習をしなければ、それらの誤用は直らないまま放置されてしまう恐れがあるため、今後TAとの会話では、もっと誤用を訂正してほしいというコメントもあった。

(3) 指導結果、成果

① Weekly test

学習した内容は、毎週Weekly test (100点満点) を行い、習得状況を確認した。さらにその上で、学習者の間違っていたところについてフィードバックした。計10回のweekly testの平均得点は、学習者Aが93点、学習者Bが78点、学習者Cが77点であり、学習した内容はほとんど理解され、定着していると判断できる。

Weekly testのほかに、指導の結果を客観的に評価するものとして、3か月後に中間テストを、半年後の学期終了時に日本語・専門科目での学習成果を総合的に現す場として、6か月終了発表会を行った。

② 3か月後に行った初級学習内容のテスト結果

3か月经過し、初級を一通り終えた段階でコース開始時に実施した同じテストを行った。その結果、図2と表7に示すとおり、非常に順調な伸びを示していることがわかった。

③ 6か月終了発表会

発表テーマは2008年12月から5回にわたり、実施してきた企業見学「東北の世界一」を通して考えたことである。

このテーマを選択した理由は、(i) 単なる半年の生活の感想ではなく、専門的側面から深く考察できる内容である、(ii) 自らが体験・実感したことを事実と意見に分け、日

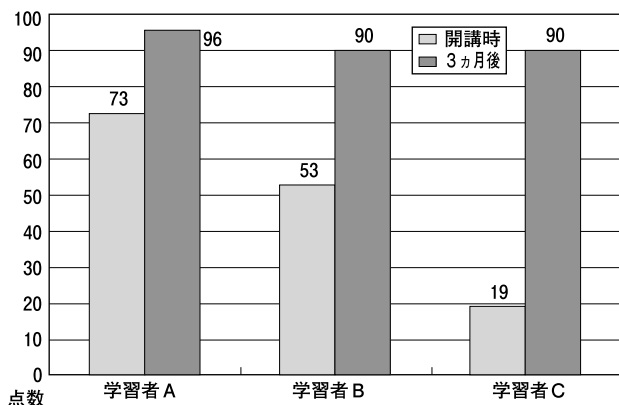


図2 開講時と3か月後の伸び

表7 口頭テスト (ACTFL-OPI方式)

	2008.10	2009.1
学習者A	中級・下	中級・上 ↑
学習者B	初級・上	中級・上 ↑
学習者C	初級・中	中級・下 ↑

(注) : 「↑」は会話能力が上昇したことを意味する。

本語で表現するのに適した内容であるという理由からである。

発表は、発表時間は一人8分、質疑応答2分である。また、発表は、コースの講師、事務員などを含む十数人によって「内容」「流暢さ」「プレゼンテーション方法」「スライドのわかりやすさ」「質疑応答の仕方」の5項目について5段階評価がなされた。また、自由記述で発表全体についての感想・コメントも出された。

通常、初級段階では質疑応答を行わないことが多いように思われるが、今回は彼らの対応能力を測る意味もあり、質疑応答の時間を2分設けた。結果は、各学習者につき2つ程度のオープンエンドの質問があったが、聞き取り、説明ともこの段階としては的確に質問の意図を捉え、よく対応できていた。これは、普段から日本語教師以外の日本人ネイティブスピーカーとの時間をできるだけ多く持てるよう、環境を整えたからだと考える。

(4) 課題

今後の課題は、「日本語集中基礎」に引き続き、四技能においてビジネス基本表現も含んだ中上級レベルの日本語運用能力を身につけることを目標にして授業を行うことである。開講1年後の2009年7月の時点では、日本語能力の1つの指標として、日本語能力試験2級合格を目指す。また、TAを導入した授業では、学習者の望みに応じて、より誤用に目を向けるようにTAに対して指導を行い、ネイティブとしての長所を生かす必要があるだろう。

4.2. ビジネス日本語コース

今学期は、「ビジネス日本語Ⅰ」を開講した。以降、半期に1科目ずつ「ビジネス日本語Ⅱ」「ビジネス日本語Ⅲ」「ビジネス日本語Ⅳ」を開講する予定である。

(1) 目標

本科目では、授業総時間(30コマ、45時間)の1/3をビジネス・ライティングにあて、残り2/3を「ビジネス日本語総合」とし、Project Based Learning方式(以下、PBL方式)で(財)海外技術者協会(以下、AOTS)が作成した共通カリキュラム教材「キャリア・プラン プロジェクト」をカスタマイズして授業を実施した。各活動の目標は以下のとおりである。

- ①ビジネス・ライティング—大学のレポート作成とは異なるビジネス文書を学び、書式や構成・用語に関する基本的ビジネスライティング・スキルを習得する。
- ②ビジネス日本語総合—(i) キャリアや人事制度に関する知識を習得する。
(ii) 留学生と日本人学生との協働作業をとおり、互いの共通点・相違点に気づき、調整する力を養う。

ビジネス日本語総合については、キャリアに対する意識を高め、日本における人事制度を学ぶことはもちろんであるが、協調性・調整力を身をもって体験することも大きな目的とした。

(2) 授業内容

- ①ビジネス・ライティング: コンピューター室で、『日本語ビジネス文書マニュアル』（アスク）を主教材に、実際に文書を作成する活動を行った。扱った内容は、ビジネス文書の基本、メールのマナー、稟議書、報告書、議事録、企画・提案書、始末書等である。MOT対象学習者以外に他専攻の留学生3名が参加した。
- ②ビジネス日本語総合: 1回の授業は2コマからなり、計10回行われた。授業には、日本人学生3名も加わり、留学生と同様の活動を行った。留学生はMOTの対象学習者1名の他に、他専攻の学生4名も参加した。

具体的な内容は、主に「キャリア」、日本の人事制度、新しい人材育成制度の3つの事柄からなり、各回の授業内容は、表8のとおりである。

表8 キャリア・プランプロジェクト授業内容

人生・キャリアに関する導入	1	ガイダンス・人生の選択
	2	職業選択の優先順位、キャリアパスの事例
キャリアをめぐる基礎知識を知る： キャリア・日本の人事制度について 情報収集・発表	3	キャリア・日本の人事制度について グループでの資料読み込み・検討会
	4	発表準備・グループ発表
	5	発表の振り返り、チームワークとは？
新しい動きを知る：人材育成制度、 女性のキャリア、評価制度	6	人材育成をめぐる新しい制度研究
	7	分担発表から全体討論へ
	8	発表時のビデオ視聴フィードバック、 「女性のキャリア」資料発表
	9	評価制度の事例研究
総括	10	キャリア再考・まとめ

(3) 指導結果、成果

今回、ビジネス日本語総合については、日本人学生と共にPBL方式で行った。キャリアに関する事例を学び、企業の実態を垣間見ることができたのも有意義であったが、毎回グループを作り、日本人学生と同じ活動に取り組むことができたのは、日本人学生・留学生双方にとって、互いの思考や文化背景の違い、あるいは、共通認識を学ぶのに非常に効果的であったと思う。

仁科・鈴木（2009）では協働作業を通じた学習者らの気づきの活動例を示しているが、留学生にとっては、自分らが発言したときの日本人学生の反応や、国が異なっても共通する価値観を確認することができた。また、日本人学生にとっても、同じ国からの留学生であっても、日本での滞在時間や生活環境により思考には多様性があることを実体験から学ぶことができた。これは、互いに将来文化背景の異なる人々と同じ職場で働くことのシミュレーションにつながると言えよう。

(4) 課題

日本人学生とともに学ぶことが効果的に働くか否かについては、内容に左右される面が大きい。今回は、日本人学生も知識の面では留学生と大差なく、ともに就職活動を前に新しい知識を吸収していく様子が見られたが、留学生の特質に特化した内容の場合、日本人学生は特に必要がないかもしれない。

また、留学生は、特に一般留学生にその傾向が多かったが、手短かにテクニク的なノウハウを学ぶことに目が向きがちで、本質的な今後の人生をどうとらえるかという信念や概念、あるいは、人事制度を知るといった活動には今一つ実感が伴っておらず、軽視する傾向が見受けられた。動機付けの点で学習時期・レディネス・検討の重要性への理解等の要素を再検討する必要があると思われた。

4.3. その他の取り組み

日本文化を知ることによって日本人や日本語への理解を深めることを目的に、1泊2日のホームステイを3回実施した。実施にあたっては、米沢市の国際交流協会の協力を得た。一般の日本人家庭でのホームステイを通し、十分に意思を伝えられないもどかしさも感じるが多かったようで、そのことが逆に日本語のレベルを上げようとする動機付けにもつながった。

5. 日本語課外補講との関係

工学部のある米沢キャンパスでは、十数年前から留学生向けに日本語課外補講が実施されており、現在は国際センターが主催・実施している。この課外補講の目的は、在籍する留学生及び研究員等に対して、研究活動や日常生活に必要な日本語教育を行うことであり、日本企業への就職を目指す日本語教育とは性質を異にしている。米沢キャンパスに日本語課外補講とMOTの「とうほくMITRAIコース」の授業が実施されたことで平成20年度後期における米沢キャンパスでの日本語関連授業は、表9のとおりとなった。費用対効果や授業活動と習得の効果を考え、MOTの日本語授業については、レベルが同等で、かつ80%以上の出席率の確保を条件に一般留学生の受講も認めている。また、日本語課外補講の授業についてもMOTの学生は受講対象の学習者となっている。

これにより、米沢キャンパスの日本語受講事情には、良い点と改善が必要な点とが生まれた。

・良い点：

- ① 研究生や大学院生などが集中して日本語を学習したい場合、「とうほくMITRAI」の初級集中クラスに参加し、短期間に体系的に学ぶことが可能となった。
- ② 日本企業への就職を希望する学習者が就職活動に必要な事柄を学ぶ機会ができた。

表9 米沢キャンパスにおける平成20年度10月期の日本語授業

	月		火		水		木		金	
	MOT	補講	MOT	補講	MOT	補講	MOT	補講	MOT	補講
1 8:50 10:20	基礎： 週テスト		基礎： 総合 日本語		基礎： 総合 日本語		中級 (話す・ 聞く)	基礎： 総合 日本語		中級 (読む・ 書く)
2 10:30 12:00	基礎： 総合 日本語		基礎： 総合 日本語		基礎： 総合 日本語	ビジネス 日本語I		基礎： 総合 日本語	中上級 (待遇 表現)	
3 12:45 14:15	基礎： 総合 日本語		基礎： 語彙・ 漢字	初級 前半		ビジネス 日本語I		基礎： 聴解		初級 後半
4 14:25 15:55						ビジネス 日本語I				

・改善が必要な点：

①とうほくMITRAIコースと日本語課外補講との授業の違いが見えにくい。

受講対象や目的・学習速度・単位の有無などが異なるが、その違いが留学生には分かりにくかった。

②一部重なる内容の整理

とうほくMITRAIコースの初級基礎からアカデミック・ジャパニーズへ移行する際の学習項目と課外補講の内容や教科書に重複するものがあつた。時期こそ異なるもののより効果的な指導方法を検討する必要がある。

③研究生等の集中授業希望者への対応

比較的時間に余裕のある研究生等の学生については、集中的に日本語を学習したいという希望を持つ者が多い。日本語力が同レベルである場合、各科目週1回実施される日本語補講から、とうほくMITRAIの集中授業へ移行するという現象も科目によっては見られた。

平成20年度は半年のみの期間であり、MOT日本語学習者の初めての受け入れであったため、日本語課外補講とのバランスが十分に取れていたとは言えない部分もある。日本語授業の主催については、日本語課外補講を国際センター、とうほくMITRAIコースの日本語授業は、MOTが行っている。主催者が異なるので、非常勤等の人的配置もそれぞれの予算で検討しなければならないが、平成23年度からはとうほくMITRAIコースの自立化が求められており、日本語課外補講との効率的共存を目指し、より合理的な科目の設置がなされる必要がある。

6. まとめ

この半年間の取り組みを「日本語集中基礎コース」、「ビジネス日本語コース」を中心に述べた。レベルが上級に達していない学習者については、どの学習者も非常に意欲的に取り組んだこともあり、順調に実践力・運用力をつけている。ビジネス日本語については、就職も見据えた日本語授業科目の提供が、他留学生にも就職には時間をかけての準備が必要であることを意識させ、よい刺激を与えつつあると思われる。現在、教材は共通カリキュラム教材を使用しているが、その一方では、この独自のプログラムに特化した、企業の声が反映されたビジネス日本語を開発する必要があるだろう。それには、より丁寧な調査を実施し、このプログラムに参加するコンソーシアム企業が必要とする日本語を明らかにしていくことが今後の課題である。

参考文献

仁科浩美・鈴木敏之（2009）「アジア人財共通教材『キャリア・プラン プロジェクト』を用いた日本人学生と留学生との協働授業活動の試み－異文化と個人の多様性の捉え方－」『日本語教育方法研究会誌』, vol.16. No.1, pp.66-67.

資料 1

Career Development Program for Foreign Students from Asia,
Graduate School of Science and Engineering, Yamagata University

Questionnaire : Japanese Language

◆ Please mark the number box that best indicates your situation.

【Name _____】

	My Japanese Ability : I can...	① Very poorly	② poorly	③ Neither well nor badly	④ well	⑤ Very well
Ex	Read Japanese names written in Hiragana			○		
1	Read all 50 Hiragana one by one aloud.					
2	Read all 50 Katakana one by one aloud.					
3	Read words written in Hiragana.					
4	Read words written in Katakana.					
5	Read a Japanese text book aloud					
6	Read and understand short messages such as seasonal greetings and cards.					
7	Read advertisements, leaflets or a menu and get the information I need.					
8	Read an easy, simple letter, and understand it.					
9	Read a small newspaper article and understand it, if I find the topic interesting.					
10	Write all 50 Hiragana one by one.					
11	Write all 50 Katakana one by one.					
12	Write my name in katakana.					
13	Ask a Japanese for his/her name, and write it down in Hiragana.					
14	Write my schedule for one week.					
15	Write what I did yesterday.					
16	Write about my school life.					
17	Write about my future plans.					
18	Write the reason why I want to study abroad					
19	Give a written explanation of a simple graph					
20	Use some greetings such as 'Ohayo gozaimasu (Good morning)'					
21	Introduce my self (name, country, age, etc...)					
22	Talk about my family (relatives, work, etc...)					
23	Ask for prices, dates, times , or places.					
24	Ask the way.					
25	Explain the way if someone asks me.					
26	Ask a question for some information					
27	Talk about my everyday life.					
28	Explain about the town I live in.					
29	Carry on a short conversation on a daily topic.					
30	Talk about my most fantastic experience of the past year					
31	Tell the outline of a drama I have read or seen					
32	Express my opinion on smoking					
33	Listen to a sound and write it down.					
34	Listen to a word and write it down.					
35	Listen to numbers, prices or times, and understand them.					
36	Listen to a question , and understand what to answer					
37	If Japanese people talk about daily topics slowly and clearly, I can understand what they say.					
38	Catch some key words of a conversation.					
39	Grasp the general contents my partner in conversation wants to express					
40	Listen to dialogue of TV news, TV drama, or film, and partially understand what they are saying.					

Thank you for your co-operation.
See you soon!